

24 ポン・デ・キャッチ

I 競技の特性

「投げたボールをキャッチする」というシンプルなゲーム。キャッチしたエリアが遠くなるほど得点が高くなり、合計得点で勝敗を競う。カゴを用いることでボールが弾んでしまい、キャッチしにくくなり、はらはら・ときどきするゲーム展開が期待できる。

「投げる」「捕る」という技術の習得は、各スポーツの基礎につながるものである。また、車椅子利用者にとっては、移動運動がほとんどないため、安全に行えるスポーツでもある。



※名前の由来…ボールがカゴから弾んで出てしまい（ボン!）、キャッチすることが難しいことから名付けた。

II 施設・用具

1.施設

室内が望ましいが、移動運動が少ないことから屋外でも可能である。

2.用具

(1)ボール(10球)

専用のボールはない。けがの危険を避けるため、やや柔らかいボールが望ましい。参加者の実態に合わせてボールの硬さや大きさを選択すると良い。

(2)カラーコーン(8個)、コーンバー(4本)

投てきライン、キャッチエリアを区切るために使用する。

(3)カゴ(1個) (4)得点板

III 競技の方法

1.人数(チームの編成等)

1チーム2名以上で編成する。対戦チーム数は特に制限はない。

2.競技の進め方(1チーム2名、2チームでの対戦の場合)

(1)1試合2イニングで行い、合計得点で勝敗を競う。

(2)各チームの代表がじゃんけんを行い、勝ったチームが先攻・後攻いずれかを選択する。

(3)各チームは、投げる選手、キャッチする選手を決める。

(4)先攻チームのメンバーは、それぞれポジションにつく。投げる選手は、自分が投げるエリアをコールし、キャッチする選手はそのエリアに入り、カゴを持ち準備をする。

(5)投てきラインから出ないように投げ、キャッチする選手がノーバウンドでキャッチすることができたら、そのエリアの得点が入る。

(6)2投目以降、1回ごとに投げるエリアをコールしてプレイをする。

(7)10球投げ終わったら、後攻チームがポジションにつき、同様に進める。

(8)2イニング目は、投げる選手、キャッチする選手を交代してプレイする。

(9)両チーム、2イニング終えた時点でゲームは終了となる。

3.投てきに関するルール

- (1)投てきラインからボールを投げる。
- (2)投げ方には制限はなく、オーバースロー、アンダースローなど得意な投げ方でよい。

4.キャッチに関するルール(図2)

- (1)ボールがカゴから飛び出してもフロアに落ちずに再度カゴの中におさめることができれば得点となる。
- (2)エリアから出なければ、手やカゴをエリア外に出してキャッチしてもよい。
- (3)以下の場合は得点にならない。
 - ①ボールがフロアに落ちた場合
 - ②ボールが体の一部に触れた場合
 - ③手でボールを扱った場合(カゴを片手で持つのはよい)

個に対する配慮については、各チームの協議により決定する。

例えば、投てき選手の投げたボールが5点エリアまで届かない場合にエリアを前方に設置したり、エリアの得点を変更したりするなど。

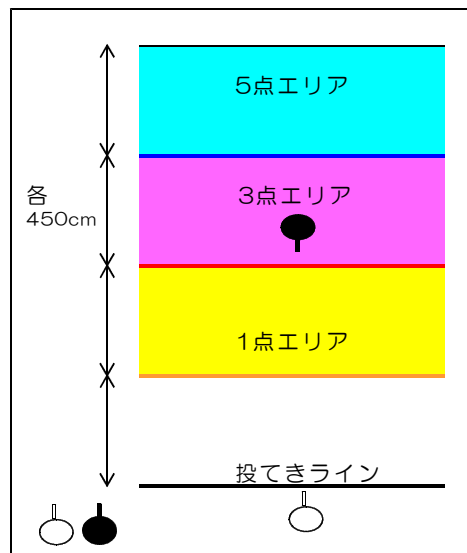


図1 コート



図2 キャッチ



IV その他

1.アレンジ

- (1)虫取り網でキャッチ(図3)

体から離れたボールに届き、キャッチできるが、網の部分までの距離の感覚がつかみにくいという特性がある。

- (2)片手でキャッチ(図4)

カゴの取っ手を握り、もう一方の手は使用できないというアレンジ。取っ手を握ると、カゴがぶらぶらして固定されず難易度が高くなる。

2.個に対する配慮(工夫点)

病弱の児童生徒でCVカテーテル挿入患者は、ボールをキャッチする活動が制限されているので、投げる専門にするなどルールを工夫する必要がある。



図3 虫取り網



図4 片手でキャッチ